

2050年の兵庫県の人口は2020年に比べて

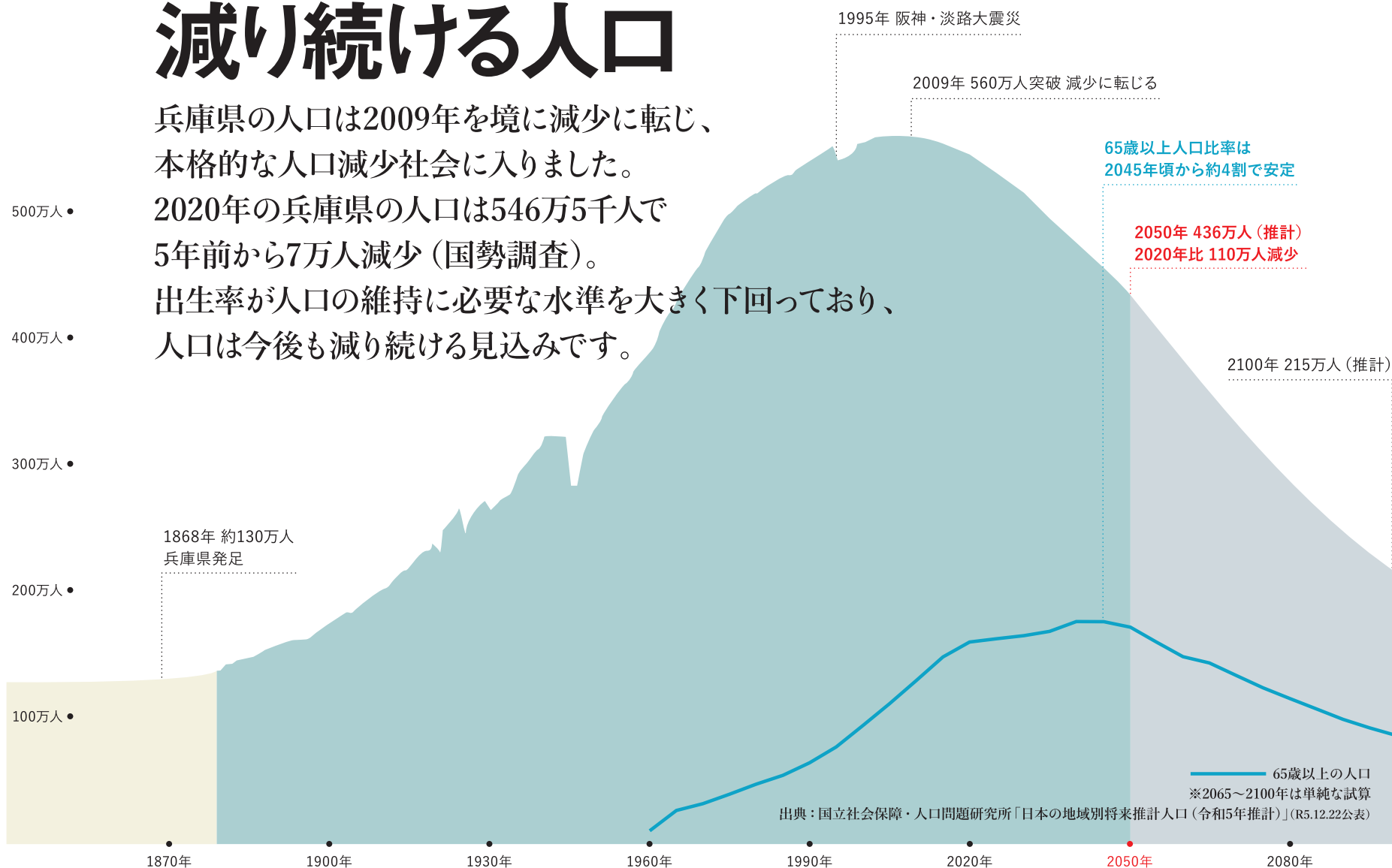
110万^人 減少!?

減り続ける人口

兵庫県の人口は2009年を境に減少に転じ、本格的な人口減少社会に入りました。

2020年の兵庫県の人口は546万5千人で5年前から7万人減少(国勢調査)。

出生率が人口の維持に必要な水準を大きく下回っており、人口は今後も減り続ける見込みです。



社会潮流と兵庫の課題

人口減少・超高齢化

一年間に生まれる子どもの数は今後も減り続け、死亡者数は増えていきます。子どもはますます貴重な存在に、死はますます身近な存在に。65歳以上の人口は実数、割合ともに増加の一途にあり、2050年には本県の人口の約4割が65歳以上、4人に1人が75歳以上になる見込みです。

地球からの警鐘

地球の気温は長期的に上昇傾向にあ

ります(過去100年で0.72°C上昇)。日本は世界平均を上回って上昇しています(過去100年で1.24°C上昇)。猛暑日や熱帯夜が顕著に増えています(過去100年で熱帯夜が全国平均で18日増加)。

テクノロジーの進化

完全自動運転の普及。人の感情を理解し、創造力すら発揮するAIの出現。ゲノム編集による寿命の延伸。未来のテクノロジーは社会のあり様を激変させるでしょう。

世界の成長と一体化

アジア、アフリカの成長で世界人口

は当面増加する見込みです。2050年には現在の78億人からほぼ100億人に近づきます。県内の在留外国人数は、2023年6月末時点で127,090人と全国7位。在留資格の緩和等により大きく増加しています。

産業構造の変化

製造業の存在感が全国的に低下していますが、本県では依然大きなシェアを保っています。近年、様々なサービス産業の発展により、経済活動全体のサービス業化が進んでおり、本県でもサービス産業の伸長が目立ちます。一方、全

国に比べて情報通信産業の伸びは鈍いといえるでしょう。

人口が減っても
豊かな兵庫をつくる。

そのヒントとなる視点と、
自分がやりたい仕事を通じて
よりよい未来をめざして
挑戦している5人の生き方を
次ページから見ていきましょう





自分らしく 生きられる社会



- 自由になる働き方
- 居場所のある社会
- 世界へ広がる交流

いろいろな価値観を認め合い、様々な選択肢から自らの意思で暮らし方や働き方を選べる社会になっています。みんなに居場所と役割があり、多様なコミュニティが活発に活動しています。各地に根差す文化や産業など五国の個性を強みに、国内外との活発な交流が行われる地域になっています。



カフェ「farm studio テーブルと燕」では調理も担当



藤田さんの言葉から考える「ひょうごビジョン2050」のヒント

- 1 手放す勇氣
- 2 人生は日々更新
- 3 出会う力を身につける

キラキラした大人に憧れて 神戸から淡路島へ移住

神戸で学び、働いていた藤田さんが今、暮らすのは淡路島。かつて耕作放棄地だった荒地を、人の集まる場所として地域の仲間とともに拓く「farm studio」プロジェクトに参加し、カフェの運営やイベントの企画を担当しています。

藤田さんの移住のきっかけは、10年前に淡路島のイベントで出会った人たちに魅了されたこと。「淡路島には地元の農家や移住者といった小さな事業主が混在していて、それぞれが自分にちょうどいい範囲で仕事をしています。自分の責任で仕事をしているからみんな楽しそうに輝いている。私もこんな風になりたいと思ったんです」

藤田さんが淡路島に行き着くまでには、いくつかの大きな転機がありました。一度目は、新卒で入ったプログラミングの会社からのキャリアチェンジ。「何か違うなと感じることが多く、毎日に希望がありませんでした。そんな時に思い出したのが、大学時代の2人の恩師です。恩師の目はいつもキラキラしていて、学生時代の私は『私もこんな大人になりたい』と憧れていました。でも、今の自分はほど遠い。そう悟ったときに、『いまの仕事辞めて兵庫県に戻ろう』と、決意したんです」

「喜びやワクワクをシェアしたい」がモチベーション

その後、神戸の通販会社、株式会社フェリシモに転職が決まり、カタログ編集や商品企画などを担当していた藤田さん。そんな中、プライベートで「淡路島で輝き出した人たち」というテーマのフリーペーパーの制作に参加することに。「島で働く同世代の農園主や、他府県からの移住者ら取材する中で心が動かされていきました。当時、私は自分が立ち上げたブランド事業から異動になり、



畑の敷地内にある2階建てスペース。「今後はここでできる楽しい企画をどんどん考えていきたい」

ブランドは会社のものだという当然のことに悩んでいました。自分は会社員に向いていないのかも感じ、個人事業主として仕事をしたいという気持ちが強くなっていったんです」

フェリシモを退職した藤田さんは淡路島で廃校跡地のカフェ「カフェノマド」の運営を任せられることに。そこでまた転機が訪れます。「2020年の春はコロナ禍でカフェを開けることができず、通販を始めたんです」。自身がセレクトした地元の生産者たちの商品を集めた「淡路島に行った気分になれるセット」は大好評。「カフェノマドは既にあったコンセプトの中で運営していましたが、通販は『藤田祥子』個人を確立できたような、そんな手応えがありました」

その後、もっと「藤田祥子」として淡路島の魅力を発信し、共有できる場所をつくりたいとカフェ「farm studio テーブルと燕」の運営をスタート。カフェは地域の生産者と訪れた人たちが人間関係を育める場として約2年半続きましたが、藤田さんは今、「また変わろうとしている」と言います。「今後はもっとたくさんの人が参加できて、ゆっくりと時間を過ごせるワークショップなどを考えています。淡路島には、いろんな人がいて、いろんな生き方があります。そんな素敵な人と出会えるドキドキをたくさんの人と共有したいんです」

藤田さんにとって淡路島は、ありのままの自分で居られる場所。「気づけば兵庫県が心地いいと感じている自分がありました。おもしろい人には都会に行かな

いと出会えないと思っていたけれど、手の届く範囲にみんないた。それは、自分自身が素敵な人たちと出会うことで『出会う力』を身につけたからかもしれません。若い人たちに伝えたいことを尋ねると、「やりたいこと、気持ちが動くことをどんどんやってほしいですね。あとは出会う人や出来事への感度を上げてほしい。私も自分が憧れたような、目がキラキラした大人になれていれば嬉しいなと思います」。



高台の畑から見える淡路島の海

藤田祥子さん

イベント企画・コピーライター

兵庫県三木市出身、洲本市在住。大学院を卒業後、IT企業や通販会社勤務を経て淡路島に移住。2016年以降「カフェノマド」「farm studio テーブルと燕」を運営してきたが、23年10月からはfarm studioの畑や古民家でのイベント企画を担当。「伝える」ことをライフワークとし、コピーライターとしても活躍中。

インタビュー動画



ここなら安心して 素直に自分を出せる

三木市出身で学生時代からは神戸で学び、働き、現在は淡路島で暮らす藤田さん。自分が一番キラキラできる生き方、働き方を模索する中で大好きな仲間に出会い、素敵な人や場所を「伝える」仕事をしています。



心身ともに 新たな挑戦が できる環境を

生まれ育った西宮で25歳の時に起業し、今年で設立7年目となる株式会社merchu(メルチュ)の代表を務める折田楓さん。2度にわたるフランス留学や、東京での就職を経て地元に戻ることを決断しました。株式会社merchuの強みの一つは「本社が兵庫県にあること」だと話します。

折田楓さん

ベンチャー企業代表

<https://merchu-inc.com/>

1991年兵庫県西宮市生まれ。慶應義塾大学卒業後、フランスの大手金融機関に就職。母親が立ち上げた婚活サロンを手伝うため2017年に兵庫にUターン。その半年後にSNSやWebを活用したオンラインブランディング、広報・PRコンサルティングなどを行う株式会社merchu(メルチュ)を設立し代表取締役。2021年から兵庫県地域創生戦略会議委員。1児の母。

インタビュー動画



新しいことに 挑戦できる社会

2 HYOGO
VISION
2050



- みんなが学び続ける社会
- わきあがる挑戦
- わきたつ文化

人生100年時代の中で、何を大切に生きるかを多くの人が自問するようになります。いろいろな経験ができ、一人ひとり異なる人生の道筋を描ける社会になっています。教育の形が変わり、生涯を通じて学び続け、新しいことに挑戦し続ける人が増えています。兵庫の多彩な文化が地域の魅力を高めています。

フランス留学を機に芽生えた 起業の夢

高校・大学時代のフランス留学をきっかけに、起業への決意を固めた折田さん。「フランスでは、お店の看板一つとってもブランドが表現されていて美しく、街全体のデザインも確立されていてワクワクしたんです。一方、日本のモノやサービスは、質が高いのに見せ方が上手ではなくて。しっかりとブランディングして、その良さを多くの人に届ける会社を作りたいなと思いました」

起業の前に「修業のつもりで」フランスの金融機関に就職。東京支店で2年間勤めた頃、母親が地元の兵庫で婚活サロンをオープンすることに。その事業を手伝いながら自身の起業準備をするため、2017年に10年ぶりに兵庫にUターン。「母に病気が見つかったことも兵庫に帰る要因の一つでしたが、何よりも生まれ育った大好きな兵庫で起業したくて。狭き門の金融機関に入ったのに辞めて、先の見通せない事業を起こして本当にいいのか、母はとても心配してくれました。私は『絶対、成功するから大丈夫!』って言って。起業は大きな決断でしたが迷いはありませんでした」

折田さんは2017年10月、目標にしていた25歳で、SNSやWebを活用したオンラインブランディング、広報・PRコンサルティングなどを行う株式会社merchu(メルチュ)を設立します。これまでに仕事を手がけた行政、企業などは200以上に。

「最初はコンサル業から始めました。母の婚活サロンの集客を上げるための広報活動にSNSが有効だったことや、SNS活用のノウハウをアメリカの論文で研究したことなど、成功事例を経営者や自治体の方たちに伝えたら大人気になって。そのニーズがとて多く、提案を喜んでくださり、会社を起こす後押しになりました」

兵庫はウェルビーイングが 実現できる街

現在、社員は15人。その内6~7割が



発言しやすい風通しの良さが魅力

女性で、2023年に「ひょうご・こうべ女性活躍推進企業」に認定されました。大学生のインターンシップも設立以来積極的に受け入れています。

「当社はウェルビーイングを重視していて、心も体も元気で楽しく仕事に取り組むことを大切にしています。週2回終業後にヨガの日を設けたり、晴れた日はテラスでも仕事ができたり、小型犬の同伴を認めたり。自分が前向きで輝いていないと、クライアントにいいサービスは提供できないと思うんです。私自身、トレンドや新しい技術の情報を積極的に仕入れ、学び続けることで自分をバージョンアップしています。さらに、「どれだけ会社が大きくなっても、本社は兵庫に置きたい」と折田さん。

「兵庫は山や川、海が近くにありながら東京や大阪など大都市へのアクセスもよく、自然と都会の両方を手に入れられる街。心身共に健康的に暮らしができる環境が整っています。今は西宮で子育てもしていますが、こんなに恵まれた場

所はないなって。それに、地方に住んでいると地方ならではの課題を実感でき、地方創生の事業を行う時にクライアントに寄り添った深い提案ができるんです」

30代を迎えた折田さんは今、若い人たちがもっと挑戦できる機会や場を提供することが自分の役割ではないかと考えています。

「情報があふれる中で、悩み続ける若い人を多く見掛けます。やってみたいになっていうチャレンジ精神を大切にしてほしい。勇気を出して一歩踏み出し行動することが、次の道を開く鍵となります」



オフィスのテラスで仕事をする折田さん

折田さんの言葉から考える 「ひょうごビジョン2050」のヒント

- 1 チャレンジ精神を大切に
- 2 学びを通して進化し続ける
- 3 勇気を出して決断し、行動する

毎週2回のヨガは社員からも好評





誰も 取り残されない 社会



- みんなが生きやすい地域
- 安心して子育てできる社会
- 安心して長生きできる社会

どんなに科学技術が進化しても、大事なことは、人とのつながりであり、人の温かみです。つながりの大切さが認識される中で、年齢、性別、障害の有無、国籍などに関わらず一人ひとりの個性が大切にされ、誰もが安心して暮らせる社会になっています。



西村源さん

オルタナティブスクール & 英会話スクールを運営

<https://ciao-sasayamaschool.ssl-lolipop.jp/sasayama-freeschool/>
<https://labo-english.com/>

1981年京都市に生まれ、1歳の時から兵庫県丹波篠山市で育つ。アメリカの高校を卒業し、コミュニティ・カレッジに2年間通う。ヨーロッパ12カ国を旅行して帰国後、丹波篠山市に戻り英会話スクールを運営（現在は弟と共同経営）。2016年にオルタナティブスクール「まめの木」を開校。妻、4人の子ども、愛犬、羊と暮らす。

インタビュー動画



やりたいことができる学校を 育った丹波篠山市に開設

「まめの木では小・中学生の子どもたちが毎日10～15人登校しています。自分の感情と向き合い、それぞれがやりたいことを考えて選ぶ、自分で決められる場所です。テストや時間割、成績表はありません。私を含むスタッフは、先生という立場ではなく、子どもたちが『これをした！』と決めたことをサポートしています」

1歳の時に京都から丹波篠山市に移り住んだ西村さん。中学生時代に規律正しい学校生活になじめず休みがちに。卒業後、アメリカに渡って、高校、コミュニティ・カレッジで学び、一旦帰国。その後、ヨーロッパ12カ国を自転車で旅し、丹波篠山市に戻りました。

「帰国後24歳の頃に、母が運営していた英会話スクールを継ぎました。夕方から生徒たちに英会話を教えるのですが、生徒が成長する姿に、どんどんやりがいを感じるようになりました」

そんな中、自身の長女の小学校入学が視野に入る時期に。

「自分で考えて選び、選択したことに覚悟を持てる人になってほしいねと妻と話したんです。そう思って、色々な学校を見に行きましたが納得できる場所は



時間割のないまめの木。何をするかは全て子どもたちで決める

なくて。じゃあ、自分たちで作るか!と『まめの木』の開設を決めました」

都市部へも行きやすく 開かれた田舎が魅力

「まめの木」は西村さんの自宅を校舎とし、敷地内には遊具やツリーハウス、ピザ窯などがあります。

「想像していたよりも、地域の人たちが受け入れてくれました。イベントには近所の人たちも参加してくれますし、お米を寄付してもらったり、バーベキューに誘っていただいたり」

ヨーロッパから帰国した時に「丹波篠山市はスゴイ!」と改めて思った西村さん。

「豊かな自然があり、京阪神の都市部にも日本海にも車で1時間程。ここで子育てをしたいと思いました」

2023年春からは、徒歩5分の場所に購入した空き家を新校舎として活用して

います。

「新校舎ではワークショップを開いたり、職業体験も始めています。月に1回地域の人も招いた居酒屋を開き、子どもたちが接客や洗い場を担当。事前に自分たちの役割を話し合い、責任感を持って仕事をすることで、自信をつけていきます。英会話スクールでもそうですが、自信を持ってない子どもが多い。自分のできることを試し、自信を取り戻してもらうのが目標の一つです」

進路に悩む若者に伝えたいのは「思い込みを取っ払おう!」ということ。

「10代や20代で『自分はこういうタイプだから』と決めつけるのはまだ早い。正解は複数あっていいし、色々な生き方があっていい。私自身、渡米やヨーロッパ旅行などをする中で思い込みを取り払い、行動して自信をつけてきました。多くの人と話し、色んなことをやってみると道は開けると思います」



英会話スクールでも友人のように生徒に接する

西村さんの言葉から考える「ひょうごビジョン2050」のヒント

- 1 選択肢を自分で作る
- 2 開かれた地域とともに
- 3 思い込みを取り払う

行動を通じて 子どもが自信を持てる場に

JR篠山口駅から車で25分程の田畑が広がる集落にある「インターナショナルデモクラティックスクール まめの木」。アメリカ人の父、日本人の母を持つ西村源さんが、2016年春から丹波篠山市にある自宅で開くオルタナティブスクールです。

ビジョンに活かす兵庫の強み strengths

五国の個性

気候風土、歴史文化の異なる旧五国が一つになった県

古くは大輪田泊、中世以降は兵庫津と呼ばれる港があり、中国、朝鮮との交易の拠点として栄えてきた兵庫県。海外の文化を全国に先駆けて進んで受け入れ

てきた「進取の気風」が兵庫県の特徴です。こうした開放的な地域性が、伝統的な価値観や固定観念に縛られずに新しい課題に挑む「進取の気性」に富む人材、企業を生み、世界へ送り出してきました。

培ってきた地力

高度なものづくり産業

阪神・播磨臨海地域を中心に基礎素材型や加工組立型の高度な製造業が

分厚く集積しています。

多彩な地場産業

清酒、素麺、皮革、鞆、線香、釣針など全国トップシェアを誇る産業や、ケミカルシューズ、播州織、三木金物、淡路瓦など著名な産地があり、約40もの多彩な地場産業が県内各地に根付いています。

世界有数の科学技術基盤

スーパーコンピュータ「富岳」や大型放射光施設SPRing-8、X線自由電子レーザー施設SACLAという世界有数の先端科学技術基盤を擁し、計算科学と光科学を中心にした知的創造拠点が形成されています。

食の宝庫

北は日本海、南は瀬戸内海、紀伊水道から太平洋に面する兵庫。気候風土の異なる多彩な土地が生む神戸ビーフ・但馬牛、山田錦、丹波黒大豆、たまねぎ、シラス、ホタルイカ、ノリなど個性豊かな食材は、兵庫発のブランドとして国内外で高く評価されています。

防災先進県

阪神・淡路大震災と、その後の度重なる災害を経験し、兵庫は安全で豊かなまちへと進化を続けてきました。兵庫が培ってきた防災・減災の知恵と技術は世界中の安全を守るために活かされています。



但馬

日本海に面し積雪が多い。県最高峰氷ノ山等の山岳、変化に富む海岸線など自然美を誇る。

丹波

豊かな土壌を活かしたブランド農産品を生産。都会に近い田舎として移住者に人気。

摂津

(神戸・阪神)

港町神戸を中心に開放的な都市文化が根付く。市街地が広がり県人口の6割が集中。

播磨

肥沃な播磨平野、豊かな播磨灘、世界遺産姫路城を擁し、県土の4割を占める広大な地域。

淡路

国生みの島。南北の大橋で四国と本州を結ぶ。古来より御食国(みけつくに)と称され、今も農漁業が盛ん。

changes 社会が求めている変化

人口が減っても豊かな兵庫をつくる

兵庫県の人口は長期的に減り続ける見込みです。その中で県民の寿命がさらに延びて高齢化が進みます。人口減少=衰退のステレオタイプの発想を改め、定住人口が減少する中でも、交流人口に恵まれ、質の高い豊かな暮らしが営まれる兵庫をつかっていくことが重要です。

未来の暮らしを守るために ただちに行動を

地球全体が暑くなり、異常気象の常態化など社会に後戻りのできない変化をもたらす恐れがあります。次の世

代により良い環境を引き継ぐためにも、災害や感染症から身を守るためにも、ただちに行動に移す必要があります。

テクノロジーを暮らしの向上に活かす

今後、ICTや生命科学などの進化が時間・空間・身体の制約を取り除き、私たちの暮らしや社会を大きく変えていくでしょう。新しいテクノロジーのリスクにも配慮しながら、その可能性をより良い社会の実現に活かしていくことが大切です。

世界とのつながりを地域の活力源に

世界はアジア、アフリカを

中心に今後も成長が続く見込みです。古くから海外に開かれた窓として発展してきた兵庫だからこそ、世界との交流を深め、そのつながりを地域づくりの原動力にしていくことが必要です。

公正で持続可能な経済社会をつくる

価値の源泉が工場設備などの有形資産から知識や技能などの無形資産に移り、人的資本投資が企業の将来を左右する時代になっていきます。経済活動のいわば非物質化に対応して産業構造の変革を進め、公正で持続可能な経済社会をつかっていくことが求められます。



新しい価値観・行動様式を根付かせる

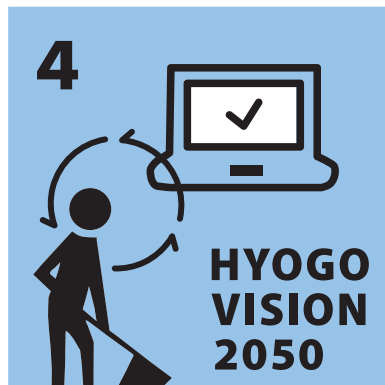
社会の新たな形を模索する動きやICTの普及を背景に、持続可能性重視、所有から利用へ、固定から流動へ、画一から多様へといった価値観と行動の変化が進んでいます。都市の脆弱性や社会の分断など様々な問題を再認識させたコロナ禍を時代の転機とし、新たな価値観や行動様式を根付かせ、多様な暮らし方、働き方が広がる地域をつくります。



「次世代の農家」をつくり 地元で恩返しする

兵庫県三木市で生まれ育った藪西史丈さん。地元で恩返しをしたいと新しい形の農業を展開し、高齢化や耕作放棄地といった日本の農業の課題解決に挑んでいます。

自立した経済が 息づく社会



- 循環する地域経済
- 進化する御食国
- 活動を支える確かな基盤

世界を覆うデジタル経済、広がるシェアリングエコノミー。そうした中で持続可能な経済社会をつくる取組が進められています。地域に根付くものづくり産業を中心に、食、農、エネルギー、文化など生活に密着した産業が成長し、地域の中で価値が循環する自立的な経済圏が形成されています。

藪西さんの言葉から考える「ひょうごビジョン2050」のヒント

- 1 直感を大切に
- 2 挑戦する勇氣
- 3 経営的視点を身につける



経営者になろうと志し
地元での専業農家へ

藪西さんが専業農家をめざしたのは、自分で経営をやってみたかったから。「実家が兼業農家で、農業が子どもの頃から身近にありましたので自然な選択でした」と藪西さん。

そのために、大学は農学部に進学。卒業後、すぐに専業農家になる選択肢もありましたが、まずは新卒でJAの子会社に就職して、農業の基礎知識だけでなく流通やマーケティングなど幅広い知識を身につけました。そして同時並行で農家からの作業受託を増やしていき、収入の目処をつけたところでサラリーマンから専業農家へ転身。「すでに家族がいたので最低限の生活は維持できるよう、着実に計画を進めました」

農業法人を立ち上げ
「山田錦バウム」を商品化

専業農家として経営が順調に回り出した頃、コロナ禍に転機が訪れます。



機械を使って作業するのは子どもの頃から好きだった



「山田錦バウム」はオンラインや道の駅で販売中

「日本酒の需要が激減し、メインの収入源だった酒米・山田錦もあおりを受けました」。契約数量が前年度より25%も減少してしまい、「山田錦の日本酒以外の用途はないか」と考えていたタイミングで出会ったのが、大阪で米粉スイーツの製造・販売を行う会社でした。「山田錦の米粉でお菓子を作ってみようということになり、試作のバウムクーヘンを食べて『これはいける!』と直感しました」と藪西さん。

こうして、小麦アレルギーの人もおいしく食べられるだけでなく、しっとりとした食感が新しい「山田錦バウム」が誕生しました。早速、合同で農業法人「稔樹(みき)」を立ち上げ、売り出すことに。

「山田錦バウム」はバウムクーヘン博覧会で上位入賞したことで人気に火が付き、グルテンフリーブームの後押しもあって話題に。現在ではフィナンシェやラングドシャなど10種類以上のお菓子を展開しています。

「農家と他業種が組んで一つの事業に取り組みむのは新しいスタイルだと思います。



藪西史丈さん

株式会社「稔樹(みき)」取締役

兵庫県三木市出身。近畿大学農学部卒業後、JA(農業協同組合)子会社に入社。2015年、専業農家として独立。コロナ禍をきっかけに、大阪市の菓子製造業者役員と協力して農業法人を立ち上げ、山田錦の米粉で作るスイーツを開発・販売している。

インタビュー動画



農業に付加価値を与える6次産業化はこれからの日本の農業のテーマですが、新しいモデルとして成功させたいですね

「新しい農業」に挑戦し
地域活性に貢献したい

独立して8年。藪西さんは「朝7時から働き、朝食後には子どもたちを保育園に送り届け、18時半には家族揃って晩ご飯を食べ、22時半には寝る」という、「自分のペースを大切にしたい理想の生活」が叶ったといいます。

「最初の5年は経営を軌道にのせるのに精一杯でしたが、経営と生活リズムが安定した今、次のステージに立とうとしています」と藪西さん。最近では、後継者のいない近隣農家から農地を引き継いでほしいという相談や、就農をめざす若者からアドバイスを求められる機会も増えているのだとか。「農家として新しいことに挑戦して成功させることが私の使命。次世代の農家のモデルをつくることで、就農をめざす若者や地域活性に貢献していきたいですね」



生命の持続を 先導する社会



- カーボンニュートラルな暮らし
- 分散して豊かに暮らす
- 社会課題の解決に貢献する産業

資源の再利用やエネルギー自立の取組が進められ、カーボンニュートラルな暮らしが根付いています。自然に囲まれた潤いのある生活を志向する人が増え、兵庫の多様な地域性を活かした豊かな暮らしが各地で営まれています。人類の持続可能性を高める産業が県内に集積し、新しい基幹産業になっています。



YATAI CAFÉが登場するのは最近では年1~2回。屋台はだいかい文庫においてある



本に囲まれたオシャレで居心地のいい空間

楽しさや面白さを入り口に
人が集まる場をつくる

守本さんは医学生の際に、地域を網羅的に知る手法の一つ、「地域診断」を行いました。学生仲間と一緒に、但馬地域でフィールドワークやヒアリングを行い、各種データを分析。地域の課題を見つけて医療教室を実施したのですが、

全く人が集まりませんでした。

「いくら正しいことを訴えても、人は来ない。楽しさや面白さを入り口にしなければ」。そう気づいて2016年に始めたのが、医療者が屋台を引いて町中を練り歩くYATAI CAFÉ（モバイル屋台de健康カフェ）でした。屋台はキットを買って自分たちで組み立てました。「面白いことやってるね!」と集まってきた人たちがコーヒーを飲みながら、ちょっとおしゃべりする中で「実はちょっとね」と困りごとを話し始めたりしました。

そんな中で浮かび上がってきた地域

守本さんの言葉から考える
「ひょうごビジョン2050」のヒント

- 1 つぶやきを拾う
- 2 ケアし、ケアされる体験
- 3 社会に対する信頼感

ふとつぶやいた言葉から相談ができた、お客さんとお店番の好きな本が被って話がはずんだり、ここにいる人たちと知り合いになって、ここが安全基地のような場所になったり。町とケアをつなぐ拠点のようなものになるといいなど

開店時間は平日13時~19時。「お店番として関わることもできるし、本棚オーナーにもなれます。1カ月2,400円を払えば自分の好きな本を置いて、お客さんに本を借りてもらえます。借りた人には感想カードを渡して、できるだけ書いてもらいます。オーナーからは『感想が送られてくるのがうれしい』と言われます」。80人以上になる本棚オーナーの居住地は市内に限らず、東京、北海道、広島など全国に。台湾や香港からの旅行者で参加する人もいます。

店内ではコーヒーやビールも提供。お客さんが講師を務める「だいかい大学」や「居場所の相談所」、持ち寄り食事会などのイベントも定期的に行っています。

守本さんの活動の背中を押してくれたのは、豊岡市が「小さな世界都市」を目指していたことだそう。「平田オリザさんが移住してこられたり、大学や新しいセンターができた、移住者が多かったり。都会的な面白さもありつつ、地域が狭いので、いろんな人と気軽に会えて違う分野の人とも話ができる。ローカルならではの面白さかなと思います」

社会的処方取り組みは隣の養父市にも広がり、守本さんはアドバイザーとして関わっています。「つながりづくりは、まだ福祉の端っこにありますが、すべてのベースになること。暮らしの中でケアし、ケアされる体験を通じて社会に対する信頼感を醸成し、互いに連携しながら、誰もが安心してつながりや表現ができるようになれば。僕たちはケアするまちをデザインしたいんです」

「薬」ではなく 「つながり」を処方。 健康はまちづくりから

養父市出身の守本陽一さんは、地域医療に携わる医療人を育成する自治医科大学医学部を卒業後2年間、研修医として豊岡市で勤務。総合診療医として働く中で、地域で暮らす人々の健康を、まちづくりの視点から考えるようになりました。

守本陽一さん

地域づくり系医師

<https://carekura.com/>

1993年生まれ。兵庫県豊岡保健所企画課と丹波市ミルネ診療所に勤務する傍ら、2020年11月、一般社団法人ケアと暮らしの編集社を設立し、社会的処方の拠点として「だいかい文庫」をスタート。法人は2021年度まちづくり月間まちづくり功労者国土交通大臣表彰。共著に「ケアとまちづくり、ときどきアート」(中外医学社)、「社会的処方」(学芸出版社)など。厚生労働省「社会的処方モデル事業」審査員。

インタビュー動画



の課題の一つが、孤立・孤独の問題でした。「孤立・孤独はWHO(世界保健機関)も認めている寿命を縮める死亡リスクの一つです。たばこ1日15本ぐらいに相当するといわれています。日本政府も孤立・孤独対策をしています」。課題へのアプローチを模索する中で、「薬」ではなく、「つながり」を処方する社会的処方という考え方に会った守本さん。2020年12月に商店街の空き店舗を使って、みんなでつくるコミュニティ図書館「だいかい文庫」をオープンしました。

暮らしの動線上に
ケアの入り口をつくる

「診療所に足を向けられない人にもアプローチできる場として、暮らしの動線上にケアの入り口を作ったかっただけです。本が好きで定期的に来るお客さんが、



HYOGO VISION 2050

ひょうご
ビジョン
2050

<https://hyogo-vision.com/>

ひょうごビジョン2050

検索



兵庫県
Hyogo Prefecture

兵庫県 企画部 計画課
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL 078-341-7711(代表)



「ひょうごビジョン2050」

人口が減つても豊かな兵庫をつくる

兵庫県では、人口が減少しても地域の活力を維持し、そこで暮らす人々が将来への希望を持てる社会を実現することをめざします。ビジョンを実現するためには、社会を構成する多様な主体が役割を分担し、補完し合いながら共に取り組む連携が欠かせません。

ビジョンに共感し、共に行動する連携の輪が広がるほど、めざす姿の実現に向けた推進力は高まります。そのためには、ビジョンを具体化していくプロセスを透明化し、広く情報を共有する必要があります。つながりから新たな可能性を生むためにも、人もモノも情報も広く共有し、得られた成果もみんなで共有する姿勢が求められます。

社会の課題は複雑化しており、模範となるモデルを探して追随することは難しくなっています。ビジョンの実現に向けては、試行錯誤を繰り返しながら、自力で道を切り拓いていく覚悟が求められます。大切なのは、実験的な試みを楽しむ姿勢です。めざす姿に近づくために何が必要かを一人ひとりが考え、学習と実践のサイクルをテンポ良く回していく必要があります。

また、地域には、そうしていろいろなことにチャレンジする人を歓迎する姿勢が求められます。失敗から学び、再チャレンジする人を応援する、失敗に寛容な風土を根付かせていく必要があります。

誰もが希望を持って生きられる

「ひょうごビジョン2050」とは、私たちが2050年ごろまでに実現をめざす兵庫の姿を県民の皆さんとともに定めたものです。めざす姿は「誰もが希望を持って生きられる 一人ひとりの可能性が広がる『躍動する兵庫』」です。「誰も取り残さ

れず、みんなが希望を持って生きられる」という意味での「包摂」と「思いのこころのチャレンジができ、一人ひとりの可能性が開ける」という意味での「挑戦」、この2つを両輪にして「躍動する兵庫」を実現していきます。

一人ひとりの可能性が広がる

包摂
×
挑戦
||
躍動

「躍動する兵庫」

ひょうごビジョン2050がめざす5つの社会

ひょうごビジョンは、「県民が共にめざす姿を描く」ビジョンです。策定にあたり1万人を超える県民の意見を集約。そこで共通していたのは「開放性」の高い社会であってほしいという強い願いでし

た。様々な壁が取り払われた未来を示し、その実現に向けて対話を重ね、みんなで合意形成して取り組む、そんな「開放性」が根底に流れる「5つの社会」をめざします。



自分らしく生きられる社会



新しいことに挑戦できる社会



誰も取り残されない社会



自立した経済が息づく社会



生命の持続を先導する社会

一人ひとりの可能性が広がる「躍動する兵庫」を 皆さんと一緒に。—— 兵庫県知事 齋藤元彦